

# 「大谷石屋根と貼り石の蔵」 分布は馬の一日の輸送範囲

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



描かれた石屋根の慈光寺山門



上石と下石を交互に葺いた石屋根

前号では、石屋根に惚れ込んだ柳宗悦と、石屋根を調査した塚田泰三郎について述べた。今回は石屋根の詳しい内容と石蔵について述べよう。

天明八（一七八八）年に幕府の巡検使に同行した古川古松軒は『東遊雜記』の中で、宇都宮について「町家草葺き多くてあしし、この辺は石の和らかなるありて、それを瓦の如く削りなして、堂塔の屋根に葺くなり、他国にはなき石なり」と記している。天明八年当時宇都宮の街中には、旅人が目に付くほど石屋根があったようだ。

ここで注目しなければならぬのは、石屋根は堂塔に見られたということである。もともと宇都宮市内に塔は無かったから、山門の間違ひと思われるが、ともあれお寺の建物に石屋根が多かったようである。ちなみに江戸初期に建立された慈光寺山門・享保十九（一七三四）年建立の

延命院地藏堂および山門、桂林寺山門などが石屋根であったことは広く知られている。

お寺の建物に石屋根が用いられたのは、貴重な建物を防火性の高い石屋根で守るといったことや、大谷石の持つ清楚な美しさ、石でありながら温かみを持つ感触等がお寺の建物に相応しいとされたからであろう。

ところで石屋根に用いる石瓦には、下石と上石との二種類がありこれを交互に重ねて葺く。この一枚の石瓦は、幅約一尺一寸（三三センチ）、長さ三尺（九〇センチ）、厚さ三寸（九センチ）、重さ約七貫目（二六・二五キログラム）ある。例えば三間（五四センチ）に六間（二〇・八センチ）の建物としても棟石等を加えると、二千貫（七・五〇〇キログラム）位の重量物となるという。そのため石屋根にするには、普通の建物よりも部材を太く、建物全体の構造も十分でなければならぬ。したがって「石屋根を作ると身代が傾く」との言い伝えがあるよ

うに、石屋根の建築には大変な財力が必要とされたのである。

江戸中期、お寺に石屋根が多く用いられたのは、前述のような理由もあったろうが、何よりもお寺のような浄財の集まる所でないとなれないものだったからである。とはいえ、本堂までも石屋根で葺いたという事例は聞いたこともない。本堂では大きすぎ、重量物の石瓦を乗せるには構造上問題があり、また、莫大な財力が必要としたからではあるまいか。

さて、大谷石の建物への利用であるが、最も多いのは石蔵である。蔵はもともと板蔵で、その上に幅一尺（三〇センチ）、長さ三尺（九〇センチ）、厚さ二寸五分（七・五センチ）の石板を貼ったのが当初の石蔵である。石板にしたのは、輸送効率の問題からで、当時の石の輸送は馬の背を利用したものであった。石板であるとして一度に四枚運ぶことができ、石瓦の場合も同じであり、一日の馬の輸送範囲は、片道約四里（二・六キロメートル）から五里（二・〇キロメートル）であったという。石屋根や貼り石の石蔵が、大谷を半径に約二〇キロメートル範囲以内に集中して分布するのはそのためである。

馬の背輸送が行われたのは明治初期までである。その後は馬車から鉄道、トラックへと変わり、厚さ三寸（九センチ）以上の重量物の輸送も可能となり、より広範囲に販路も広がった。そして工法も貼り石から積み石と変わったのである。